

だし丸くんしポート〜半田の魅力を再発見〜

第12回

尾張藩の黒船対策と「亀崎高根山の烽火台」

半田市文化財専門委員長 河合 克己



開国を求めて再来日したペリー提督率いる米國太平洋艦隊の江戸砲撃におびえた幕府は、要求されるまま不平等な「日米修好通商条約」へつながる「日米和親条約」に調印し、我が国は長い鎖国の眠りから覚めた。安政元年（1854年）のことである。

その七八十年ばかり前から日本近海には多くの米、露の捕鯨船等が出没し、中には上陸して水や食糧を求め、通じない言葉の壁もあつて住民に乱暴をはたらくといった事件が続発していた。

海岸に面する諸藩はそれを重く受け止め、異国船に対する海防対策に積極的に取り組んでいた。尾張藩は異国船が伊良湖水道から伊勢湾へ侵入することを想定して藩船奉行千賀志摩守に対策を策定させた。

蓬左文庫に残る記録「知多郡砲台烽火台」には次のような対策が記されている。

先ず、師崎村の千賀志摩守の屋敷庭に「遠見番所」を設け、遠眼鏡で伊勢湾口に侵入する黒船のいち早い発見に努める。

次に、名古屋城への連絡手段として、知多半島の高地に「烽火台」を設置し狼煙による素早い伝達を図る。強風や雨天を想定し、十数人の武士による徒歩での駅伝式での連絡も併せ行つた。そして、伊

勢湾を航行する異国船を攻撃するために、名古屋鍋屋町の御用鋳物師の水野太郎左衛門に鑄造させた、各種の大砲を設置した台場（砲台）を建設するというものであった。台場は師崎先端の林崎と、磯ヶ浦近くの内海、色村の二ヶ所に設け、式拾貫目玉火矢筒、拾式貫目忽砲、三貫目迦農砲、三貫目カルロウナターテ等の大砲を砲弾や火薬等と共に運び込む手筈を整え、加えて、熱田の港に藩所有の関船（戦艦）を中心とする二編成の迎撃艦隊を編成し、伊勢湾内で異国船を迎撃し名古屋への脅威に備えるというものであった。

簡便、且つ迅速なお城への伝達手段である烽火は次の烽火台から順に揚げられる計画であった。

先ず一番目の烽火台は遠見番所近くの大井村小海田の標高52mの丘陵上、それを布土村の祭山（56m）で受け、次は現在の武豊町役場のある長尾山（32m）、続いて、亀崎中学校の東の高根山（50m）で受け、緒川新田の83mの丘陵上を経て、最後は大高烽火台によつてお城へ情報を伝えるという仕組みである。当時の郡内某村の記録に、烽火台用の燃料として、枯松葉、青松葉各〇貫目、他に狼糞〇俵の提出を指令した記事が残る。「狼の糞は煙を真上に上げる働きがある」という伝承



▲今も残る大井の烽火台の遺構

参考文献：知多郡砲台烽火台 乾坤（蓬左文庫蔵）
亀崎町史

が中国にあるという。
某年某月、尾張藩は海防大演習を挙行した。黒船に見立てた千賀氏の手船が伊勢湾口に姿を現すと、遠見番所の知らせによつて各烽火台は高々と烽火を上げ、同時に、駅伝担当の連絡武士達は股立ち高く草鞋履きで名古屋へ向けて出発、各砲台は予て用意の大砲に弾丸を装填、沖合の黒船めがけて轟音発射。侵入艦隊の近くに高々と水煙りが上がるかと思いきや、徒に海岸の砂を吹き飛ばしていった。

亀崎の烽火台は半田村の小栗某が担当していたというが、詳細は不明である。

防災 Memo 12

地震に強く安全な住まいにしましょう

住宅の耐震対策は耐震補強が最も効果的です

- 耐震改修工事には、壁の筋違取付、合板張などや瓦の葺き替えによる屋根の軽量化などの工法があります

補助金を受けられた方の平均工事費は240万円程度となっていますが、150万円程度で耐震性を確保できた事例もあります。
改修工事をお考えの方は、建築課までお気軽にご相談ください。



●問合わせ 建築課 ☎84-0671